

報告番号	甲 乙 第 号	氏 名	脇田 道子
<p>主 論 文 題 名： モンパの民族表象と伝統文化の動態に関する文化人類学的考察 —インド、アルナーチャル・プラデーシュ州を中心として—</p>			
<p>(内容の要旨)</p> <p><b>第1章 研究の目的</b></p> <p>本研究の目的は、インド、アルナーチャル・プラデーシュ州（以後、アルナーチャルと略す）の西部、中国との国境地帯に住むモンパの集団形成や文化の様相を多様な視点で提示し、動態的な過程を考察することである。</p> <p>モンパとは、かつては、チベット中央部からみてヒマラヤ南麓一帯のモン〈mon〉の地、モンユル〈mon yul〉に住む人びとの総称で、特定の集団を指す呼称ではなかった。チベット語の「モン」の語源は、中国語で南方の異民族を意味する「蠻」(mán)に由来し、「南あるいは西の山岳地帯に住むインド人でもチベット人でもない蛮族」を意味していた。この総称であるモンパに含まれていたと想定される人びとは、インド、ブータン、そして中国（西藏自治区）の3ヶ国に見られる。だが、本論文が対象とするのは、独立後のインド憲法342条に基づき、教育、雇用、議席などの優遇政策を受ける行政的な範疇である指定トライブ(Scheduled Tribe)として「モンパ Monpa」となった人びとである。</p> <p>モンパが住むのは、州の西端のタウン県、西カメン県の二県である。5万人に満たない人口であるが、言語、居住環境、信仰などさまざまな違いのある人びとが指定トライブのモンパとなっている。だが、モンパがその範疇化に異を唱えているわけではない。逆に、同じ民族衣装をまとい、現在は、チベット語教育やモン自治地域を求める運動さえ進めている。</p> <p>言語教育や自治要求という近代の国民国家と切り離せない運動を進めていく上ではそれを支えるためのトライブ集団モンパとしての共通のアイデンティティがなくては国家と対峙することはできない。それが、果たしてあるのかどうか、あるとしたらどのようにそれを形成したのかに筆者の関心がある。</p> <p>アルナーチャルは未解決な国境線、マクマホン・ラインに面し、1962年の中印国境紛争では、タウン県と西カメン県が戦闘の舞台となった。紛争後、国境は閉ざされ、アルナーチャルはインドが実効支配しているが、係争地であることには変わりはない。国境問題は、イギリス植民地時代の負の遺産をインドが引き継いだものであるが、その影響を現地からの視座で、多面的にとらえてゆくのも本論文の目的の一つである。</p> <p>本論文では、トライブという用語をインドの行政用語としてカタカナ書きで使用しているが、民族という用語を使用することもある。民族を定義することは難しいが、筆者は、民族というものがすでに「ある」ものであるとは考えていない。「民族は虚構だ」との主張もあるが、実際に中国では「少数民族」、インドでは「トライブ」</p>			

という国家が決めた範疇の中で生きている人びとがいて、「民族」になろうとする人びとの存在そのものは否定されるわけではない。それをモンパを通して示すのも本論文の目的である。

本論文は、「民族衣装」、「伝統文化」、「言語と自治要求」、そして「ツーリズム」と異なるテーマ設定による独立した論文からなっているが、各章の内容は相互補完的である。さまざまな視点から、モンパと範疇化された人びとの過去、現在、そして未来を考察していく。

## 第2章 調査地の概要

アルナーチャルは25以上のトライブからなり、州人口の66.95%が指定トライブである。西カメン県、タワン県は、州の西端に位置し、主要トライブはモンパであるが、その総数は、43,344人に過ぎない。他に、ミジ（サジョラン）、アカ（フルツ）、ブグンなどの数千人規模の人口しか持たない少数集団がいる。実際に、指定トライブのモンパに範疇化された人びとは、大きく分けても3~4、細かく分けると11もの異なる言語を話す人びとからなっている。モンパは、チベット仏教のゲルク派を信奉しているが、西カメン県には、シャーマニズムによる動物供犠を行っているモンパもいる。そして、モンパは、州内の非仏教徒のトライブを「野蛮人」という意味をこめて、ロバ(*Loba*)あるいはギドゥ(*Gidu*)と陰で呼ぶことがある。モンパには、自分たちは「チベット人ではないが、ロバやギドゥでもない」という意識がある。

この二つの県の歴史は、チベットやブータンとの関係が深い。ダライ・ラマ5世の時代、1681年にタワン僧院が建てられ、チベット仏教ゲルク派のモンユルの布教の根拠地となり、チベットによる支配が始まったが、モンパは国境をもたず、チベット人との関係は、支配者・被支配者という関係であった。中印国境紛争当時、モンパの村からは多くの人々が戦火を逃れてアッサム平原を目指した。その逃避行は、悲惨なものであった。この紛争後、チベットとの国境は鎖され、インド憲法の下で優遇政策を受ける指定トライブとなり、モンパのインドへの帰属意識が強まっていった。

## 第3章 民族表象としての衣服

本章では、モンパ女性の民族衣装に焦点を当て、それがどのようにモンパ、および隣接する少数派集団との間のローカル・ポリティクスを表象しているかを考察する。

モンパは、~族というような部族集団を形成していたわけではなく、モンパとはあくまでもインドの行政上の名づけであり、実際にはさまざまな集団を内包している。だが、現在、ほぼすべてのモンパ女性が、同じ民族衣装を着るようになっている。臙脂色の貫頭衣シンカ、その上に羽織るトゥドゥン、腰当て布、帽子、靴などがモンパを特徴づけている。これらの衣装は、ブータンの国境地帯のダクパ、ブロクパと呼ばれる人たちにも共通するものである。誰が着はじめたのかはわからないが、素材であるエリ・シルク（野蚕絹）やラック・カイガラムシの分泌液から作るラック染料が、モンパの居住地では入手できないものであり、モンパ自身が作っていたものではないことがわかってきた。人びとは、もとはウール製の貫頭衣を着ていて、東ブータンのラディ村近郊の人びとなどによって織られたエリ・シルクの衣装がしだいに

モンパの間に広がっていったものと思われる。その時期は、20世紀半ばごろ、つまり、支配がチベットからインドに転換する時期で、異なる地域に暮らし、衣服も異なる人びとが、指定トライブのモンパとして次第に集団の帰属を表象する民族衣装を着るようになったといえる。

一方、モンパの居住地の南に住む少数派のトライブ集団は、白い貫頭衣を民族衣装としていて、臙脂色はモンパだけのものである。モンパの衣装や周辺の集団の衣装の変化を見ていくと、衣服が地域での相対的な力関係において、文化的ヘゲモニーを示す他文化との接触によって変化していくものだということがわかる。また、貫頭衣という形式そのものは、19世紀から20世紀にかけてブータンのクルテ地方などでも着られており、東ブータンを含む、モンユル一帯にあった共通衣服であった可能性がある。

モンパが着る貫頭衣には、腰当て布が欠かせないが、白い貫頭衣を着る他のトライブにはそれがない。この腰当て布はモンパの場合には、縞柄、赤色、黒色の3種類ある。腰当て布は、ブータンのプロクパの場合も欠かせないものであるが、色は黒色のみで絶対に他の色は使用しない。同じような衣装を身に着けながら、腰当て布の有無や色で差異化を図っていることがわかる。

だが、この民族衣装も、次第に普段着からハレ着にかわりつつある。1962年の中印国境紛争の後に道路ができ、インドの工場製の安価な衣服が大量にもたらされたことに原因がある。また、自然素材の需要の高まりにより、エリ・シルクやラック染料の価格が高騰し、高級品も出回るようになり、モンパの一体感を示すはずの民族衣装が貧富の差を表象するようになってきている。

インドにおいてサリーが、多様な出自を隠すのに都合のよい「国民衣装」として近代に入って選択、採用されたのと同様にモンパの場合にも、貫頭衣のシンカは、指定トライブのモンパの多様性を隠すものとなっている。この民族衣装が、第5章で述べるポーティ語（チベット語）教育や自治地域要求運動、そして第6章で取り上げる観光化の展開を通してどのように変化してゆくかを見定めるには、今後の観察が必要である。

#### 第4章 伝統文化と現代—タワン県を中心として—

ここではタワンのモンパの三つの伝統文化を、定着、衰退、継続の三つの側面から考察する。

一つは、タワン僧院で毎年チベット暦の11月に開かれる、トルギャ祭と3年に一度のドンギェル祭である。悪霊払いの儀礼が主たるものだが、3日間にわたり、早朝から夕方まで、仮面舞踊が繰り広げられる。ここでは、因果応報、悪霊調伏、輪廻転生などの仏教教義が人びとに可視化される。そして高僧による加持、弥勒菩薩の巡幸による祝福を受け、さまざまな障害からの守りを得て、人びとは心安らかに家路につく。民衆教化の色合いの強いもので、チベットとの関係が断絶しても仏教の伝統は完全にこの地に根づいていることがわかる。トルギャ祭、ドンギェル祭にはブータンのサクテンやメラからも多くの人が雪の山道を歩いてやってくる。ブータンは、ドゥク・カギェ派を信奉する

仏教王国であるが、メラやサクテンの人びとはダライ・ラマを座主とするゲルク派を信奉している。ブータンでは、少数派である彼らが、この地域最大のゲルク派寺院であるタワン僧院での法要に参加することは、彼らにとって、大きな喜びであることがインタビューからわかる。また、多くの人びとが集まる祭りの場では、国境をまたいで、さまざまなモノとヒトとの交流が見られる。

二つ目は、ヤク・チャム（ヤクの仮面舞踊）で、モンパには重要な動物であるヤクがどのようにこの世に現れ、モンパの地で繁殖していったかを口承伝説を基に無言劇に仕立てた民俗儀礼である。正月に一日かけて村の広場で楽しむもので、ここでは、ギャンカル村のものを中心にいくつかの由来譚を紹介する。同様のものがブータンのメラでも見られ、そちらはテキストを媒介として伝承されているが、モンパは文字をもたないため、次世代への伝承が危ぶまれている。以前は、モンパの伝統芸能として、州外での公演などの機会もあったが、その座をチベット人の若者グループがコンパクトにまとめた「舞台上のショー的なパフォーマンス」に奪われている。人びとが伝統を伝統として意識していない、「前近代」にいて、状況をモニタリングするという意味での再帰性がまだ十分に発生しておらず、伝統文化を意識化できていない。そのような現状では、「主張する文化」となることはできず、客体化、資源化するには無理がある。かつてタワンにあったボン教起源の儀礼が、最後の傳承者の死と共に衰退したのと同じ道をたどる可能性もある。

三つ目は、モクトウ村のジンチョウゲ科の植物の靱皮を材料とした紙漉きである。原始的な製法ではあるが、機械に頼らず、すべての工程を一人でこなせるという利点がある。かつて、政府が機械を導入したことがあるが、電気供給が不安定なタワンでは役にたたず、それらの機械は放置されているという現状がある。結局、従来のやり方で継続され、紙漉き小屋も少しずつ増えている。それを支えているのは、グランマと呼ばれる、伝統的な互助システムである。また、この手漉き紙の最大の顧客は、ブータンの寺である。マニ車の中に入れる経文をこの紙の上に刷るためにモクトウの紙を大量に購入するという。その用途が仏教と結びついているため、継続性、反復性が期待できる。

## 第5章 言語とアイデンティティ—ボーティ語教育とモン自治要求運動を事例として

本章では、現在進行中のモンパの僧侶、政治家、知識人によるボーティ語（チベット語）教育と自治地域要求運動について4つのポイントに沿って考察する。

その第一のポイントは、要求している言語がモンパの母語ではないチベット語であり、それをボーティ語と呼んでいること、第二は、モン自治地域を要求しているが、アルナーチャルが自治地域を主張できる憲法の第6付則の適用除外地域であること、第三は、この運動に対するモンパ以外の人びとや運動の外にいる人の反応、第四は、ボーティ語要求について書かれた先行研究の検討である。

モンパは、共通の言語も文字も持たず、仏教徒であるという共通のアイデンティティを構築するためにチベット語教育を要求しているが、それは、州内にいるチベット難民に対する排斥運動やラダッ

クなどインド内の他の地域と連携を組んでのボーティ語の公用語化運動を意識したものとなっている。そのため、チベット語という直接的な言い方を避けていると推察される。モンパの自治要求運動の動きは、2003年からの経過報告で追うことができるが、2004年に州議会を通過し、2008年に中央政府に送られた。結局、回答は得られず、州内では、モンパの自治要求に対する学生組織による反対デモが行われた。その後、2011年4月のモンパ出身の州主席大臣のヘリコプターによる事故死とその後継者選びを巡っての州内の混乱があり、自治地域要求は、立ち消えになったかに見えたが、2013年になってまた運動が再開されている。第6付則の適用外でありながら自治を獲得したアッサムのボド領域県の例もあり、まったく不可能ではないが、自治要求に対して州内の他の地域のトライブからは、「州を分断するものだ」との反発の声がある。アルナーチャルは北東諸州のなかでは平和な州だとされてきたが、近年、トライブ間の対立が表面化している。そうした状況の中での要求運動であるため、モンパの人びとの間でも戸惑いがある。

先行研究の中で、ボーティ語要求を、ヒマラヤの他の地域との「想像の共同体」意識によるもので、ボーティ語で教えようとしているものが、モンパの文化ではなく、チベットのものだという批判がある。モンパの言語要求が「想像の共同体」意識によるものであることは、それが母語でないことから同意できるが、この批判の中では、モンパが、チベット文化圏の中にあり、モンユルもチベット文化の一端を担ってきたことが無視されている。

言語や自治という国家を相手にした要求の場合、当然、われわれ意識をもったトライブ集団なり、民族集団という単位が必要になる。この二つの運動は、行政上の名づけである指定トライブの「モンパ」が共通のアイデンティティをもった「モンパという民族」となることを目指し、国家や州内における自らの存在の再定位をはかる過程とみなせるのではないだろうか。

## 第6章 シャングリ・ラへの挑戦—国境地帯のツーリズムの現状と課題—

これまで、モンパの民族衣装、伝統文化の変化、言語と自治を求める近年の動きなどについて述べてきた。本章では、視点を変え、仏教文化を資源化しようとするアルナーチャルの観光開発の現状と課題について考察する。

国内でも開発が遅れた地域の一つであるアルナーチャルでは、「豊かな自然」と多くの民族が住む「文化的多様性」を目玉にした観光は、雇用の創出、経済発展の手段として欠かせないものとされてきた。だが、中国が領有を主張する係争地であり、州への入域には、特別許可の取得が必要となっている。

2012年は、アルナーチャルにとって記憶に留めやすい年であった。第一は、1962年の国境紛争から50年目にあたったこと、第二は、州に昇格してから25年目を迎えたこと、第三は、州に外国人ツーリストが入域許可された1992年から20年たったことである。さらに画期的な出来事は、世界

的な旅行ガイドブックのロンリー・プラネットによって、アルナーチャルが、「2012年に旅行したい地域トップ10」に選ばれたことである。そして、そのキャッチフレーズは「最後のシャングリ・ラ」である。州政府もそれを起爆剤に観光の推進を切望しているが、問題は多い。

インフラの未整備、特別許可が必要であること、政府による観光宣伝の未成熟、村落観光の限界、官製イベント祭が無計画で、費用の無駄遣いになっていることなどが挙げられる。では、シャングリ・ラという仏教の聖地をイメージさせるキャッチフレーズについてはどうだろうか。タウンには、アルナーチャル最大の歴史建造物であるタウン僧院があるが、トルギャ祭やドンギル祭は西暦の1月ごろであるため途中の峠が雪で閉鎖されることもある。また、タウンは、ダライ・ラマ6世の生誕地でもあり、母親の実家を守る家族も現存するが、地元の人びとにもほとんど知られていない。他の観光スポットも国境近くにあるという理由で外国人観光客の立ち入りは認められていない。州の観光行政の問題点の一つは、政治家の汚職が蔓延し、無計画に無駄な施設が作られ、結局、使われずに廃墟になっていることである。西シアン県のメチュカには、8世紀のパドマサンバヴァが瞑想したと伝えられる仏教の聖地があるが、ここは、国境を警備するシク教徒の兵士たちからは、シク教の開祖で初代のグル・ナーナクの瞑想地とされ、仏教徒とシク教徒が共有する聖地となっている。軍事施設があることから写真撮影の規制なども厳しく、ここでは観光客は招かれざる客となっている。

第5章でものべたように、州内ではトライブ間の争いが表面化し、水力発電や汚職に対する反対運動が活発化している。また、バングラデシュからのチャクマ難民の排斥運動や隣接するナガランド、アッサムなどとの問題も抱えている。「シャングリ・ラ」イメージは、可能性と限界性とをともに浮き彫りにする外部からの強い働きかけであるといえる。

## 第7章 結論

かつて、「インド人でもチベット人でもない南の蛮族」の総称だったモンパが、インドの指定トライブとなり、同じ民族衣装を着ることにより、次第にモンパとして統合されつつある。1962年の中印国境紛争後からインド化が進むことになったが、伝統文化に関して言えば、インド化の影響は直接的ではない。しかし、ヒンディー語教育によって母語を話せない若い世代が口承伝統を継承することが難しくなるという影響が指摘できる。現在、モンパのエリートたちが率いている言語教育や自治要求運動は、異なる言語をもつモンパをチベット仏教のもとに統合し、行政上の名づけであるモンパからモンパという「民族」になり、自治を要求して州や国に対して自らの存在を再定位する過程ととらえられるのではないだろうか。ただし、自治要求には他の集団からの反発もあり、トライバル間のコミューナルな対立を生む可能性がある。それは、観光化の現状をみてもある程度予測することができる。

モンパがインド国民となってから60年あまりたった。同じ民族衣装を着ていても、言語や地域の異なるモンパの間に「われわれ意識」があるのかどうかは、まだわからない。その答えは、現在進められている言語や自治要求に人びとがどのように関わっていくかを観察することによって見えてくるのではないだろうか。

